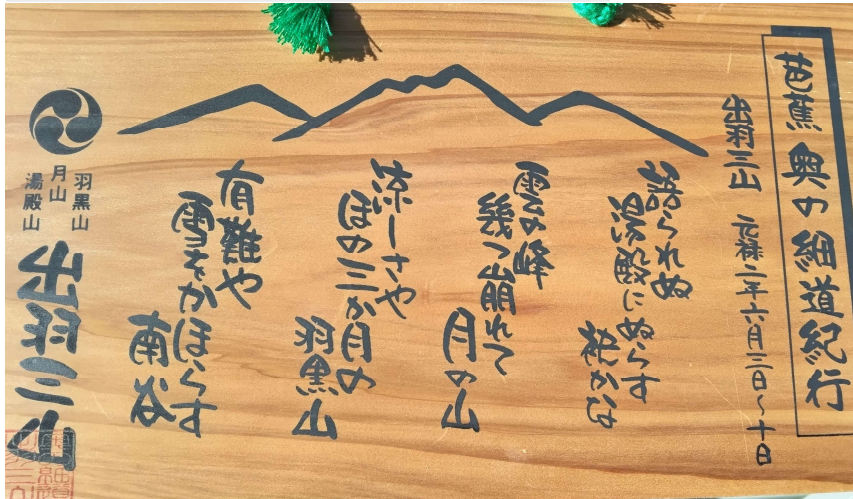
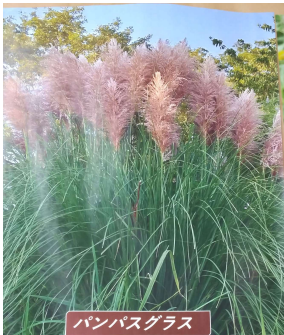


# 白金葎

THE  
SHIROGANE  
YOSHI



元禄2年6月8日会覚の求めに応じて揮毫した三山巡礼の句々  
(H.27 (2015) 7.6 羽黒山投句箱に投句 (老鶯の一際高く羽黒山) の入選賞品)



花の丘公園の写真

子を欲らぬことも生き方めだか飼ひ  
沖縄と江戸風鈴の並び鳴る  
金魚玉埃かぶれる小あきなひ  
牧場の真昼音なし牛灼けて



2025/7/17 の白金葎

璃子 (穴まどひ平 21) 高志選  
" ( " ) "  
" ( " ) みち選  
" ( " ) "

令和7年 (2025)

7月号

166号

定例会（9月の兼題…名月、蓼の花）

八月は休み

九月十九日（金）アビスタ第三会議室 12〜15

十月十七日（金）アビスタ第三会議室 12〜15

七月句会（<sup>25</sup>七、<sup>18</sup>）（目高、七月）太字は当日句

病院の待合室に目高売る

七月のスズキアリーナミセス築場

にいに蝉風の葉擦れの音の中

短冊や七夕竹の葉は枯れて

グリーンカーテンゴーヤ幾つも生り下る

プラタナス若葉に学び楽しけれ

光成高志

人影を見れば目高の寄ってくる

少女らのいつまで笑ふ猫じやらし

七月の青き無花果あまた生なる

今夜から家族となりし鈴虫は

犬四手の数本あつて木下闇

稲の花できたて飯の匂ひする

浅野正美

七夕の短冊吊るし笹しなる

布袋草よけて集まる目高かな

七月やペットボトルを持ち歩く

七月や家族旅行に誘われる

目高の子エサに群がり浪たてり

病む人に土用鰻を少しだけ

佐々木由紀子

水槽のメダカすいすい泳ぎ行く

目高たち尾っぽくねくね泳ぎ行く

七月や大空高く青い空

七月や水槽にゐる目高かな

七月や七夕様も飾られて

青空にぽっかり浮かぶ雲の夏の朝

山下寿幸

竹藪や麓の池に目高浮く

曳山や「虹の松原」郷帰り

蜘蛛の糸一筋高く蛾がモガキ

大雷雨追われ慌てて家路かな

垣根先牡丹と並び夏薊

稲穂先モコモコ浮かぶ雲の峰

山尾万世遊

女将飼う目高に名付けガラス鉢

昨夜芸妓指ピストルに七月帯

乳首立てつつく女将の夏浴衣

黒堀を出て来る女将の白日傘

抱き返す叔母の真珠やいなびかり

166号選句一覧 ○字は選者の頭文字。 富特選

○病院の待合室に目高売る

人影を見れば目高の寄ってくる

由七夕の短冊吊るし笹しなる

水槽のメダカすいすい泳ぎ行く

○竹藪や麓の池に目高浮く

毒女将飼う目高に名付けガラス鉢

由青空にぼつかり浮かぶ雲の夏の朝

由毒富少女らのいつまで笑ふ猫じやらし

七月のスズキアリーナミセス築場

毒布袋草よけて集まる目高かな

目高たち尾っぽくねくね泳ぎ行く

曳山や「虹の松原」郷帰り

昨夜芸妓指ピストルに七月帯

富病む人に土用鰻を少しだけ

○由毒にいにい蟬風の葉擦れの音の中

由七月の青き無花果あまた生なる

富七月やペットボトルを持ち歩く

毒七月や大空高く青い空

○富由蜘蛛の糸一筋高く蛾がモガキ

乳首立てつつく女将の夏浴衣

由富稲の花できたて飯の匂ひする

○由毒短冊や七夕竹の葉は枯れて

由富由今夜から家族となりし鈴虫は

秋の夜長鈴虫の声に心癒されます。家族となりしと大切に

思うやさしさを感じます（正）。

七月や家族旅行に誘われる

七月や水槽にゐる目高かな

大雷雨追われ慌てて家路かな

由毒黒堀を出て来る女将の白日傘

稲穂先モコモコ浮かぶ雲の峰

○由グリーンカーテンゴーヤ幾つも生り下る

犬四手の数本あつて木下闇

○由毒富目高の子エサに群がり浪たてり

七月や七夕様も飾られて

垣根先牡丹と並び夏薊

抱き返す叔母の真珠や夏盛る

プラタナス若葉に学び樂しけれ

俳窓評論纂

\* 2025.6.27 朝日オピニオン&フォーラムに佐伯啓思の異

論が載った。戦後80年「この世界」の横文字の

見出しに米国追従続けた日本・真の現実に直面せず・

楽園は変わらず漂う の縦の見出し。この三つの見

出しが論の要旨をよく言い得ている。評論家の江藤淳に

よる論考「『ごっこ』の世界が終わったとき」が発表されたのは、1970年の雑誌「諸君！」の一月号であった。今の日本では、真の経験を味わうことは難しい。あらゆる行為がいつのまにか現実感を奪われてしまう。この現実感の希薄さが、今日、もどかしさと同時に身軽な自由さをもたらしめている。様々なタブーは緩くなったが、その反面、誰もが何かに対して共犯者のような関係に置かれている。それを江藤は「ごっこの世界」と呼んだ。例えば、左翼系の学生運動はせいぜい「革命ごっこ」であり、自民党の唱える自主防衛もまた「自主独立ごっこ」でしかない。三島由紀夫の「盾の会」も「軍隊ごっこ」である。（中略）「ごっこ」が出来る理由は、防衛にせよ、経済にせよ、戦後日本の基本構造は、あくまで米国によって作り出され、また支えられてきたからである。（中略）平和を唱えた左翼護憲派も繁栄を主張した自民党保守派も結局、米国の軍事力と世界戦略のもとでの「対立ごっこ」であった。こういう世界では、本当の政治的課題は存在しない。なぜなら、真に重要な政治課題とは、自らの意思と手で「日本と云う国家」を造る事であり、それこそが「公的なもの」だからである。「ごっこの世界」には真の「公的なもの」は存在しない。「公的なもの」とは、自分たちの共通の価値の自覚にあり、それは、

自らの生を共同体の運命として引き受けることである。だから、「公的なもの」の方向指示器を米国に委ねれば、日本の政治から「公的なもの」という感覚が失われる。その結果、日本の政治にあつては、もろもろの「わたくしごと」が政治空間を占拠した。これが70年に江藤が述べたことである。ところで、彼は論考の後半で戦後日本の「ごっこの世界」はいまや終りつゝあるという。「ごっこの世界」とはリアルな現実には直面しない一種の楽園であるが、この楽園の出し物はもう終わりを迎えつゝある。その理由は、冷戦構造の変化や、日本の経済成長により、日米関係も大きく変化するからだ。例えば米軍が日本から撤収し、日米安保体制はまったく新たな局面に至るだろう。いずれ遠くない将来、日本は、念願の「自主独立」に近づくだろう。そして、その時、リアルな国際政治の現場に遭遇した日本は、ようやくあの敗戦の意味を論じ、その敗戦のからの回復という現実には直面するだろう。それは日本のアイデンティティーの回復であろう。これが江藤の意見。以下は佐伯氏の意見。確かに、戦後の日本は「敗戦」を「終戦」といい、45年8月15日を「終戦の日」と称して、あたかも戦後民主主義を立ち上げた記念日であるかのように装った。そのことによつて真の「終戦の日」である52年4月28日（サンフ

ランシスコ講和条約発効）は歴史の教科書の欄外に書かれる程度になってしまった。その結果、45年から52年までの連合国による占領は、「戦中」ではなく「戦後」に含まれてしまった。そして52年の講和条約により日本は主権を回復して国際社会に復帰すると同時に、日米安保条約が発効した。かくて、自らの手で戦争の意味を問い直し、敗戦によるアイデンティティ（identity）の崩壊に直面する間もなく、日本は米国の庇護のもとに戦後を継続する。日本は米国の「保護領（プロテクトレート）」になったのである。江藤はいずれ近いうちにこの状態は終るだろうという。その時に「戦後は終る」。そして日本人は改めて死者に手を合わせ、自らの共通の価値観や運命を思い起こすだろうというのである。だが、本当にそうだろうか。あれから55年、日米関係も日本人の国家意識も、何も変わっていない。「ごっこの世界」は決して終わらず、もっと深く進行し、何やら日本のお家芸ではないかとも思えてくる。だが、それはただ日米同盟や米国の戦略のせいだけなのであるか。江藤が「ごっこの世界」を発表した70年、大盛況の大阪万博をはさんで、11月の寒い日に三島由紀夫が市谷の自衛隊に乱入自決した。その少し前、三島は「果たし得ていない約束」と題するエッセイを「サンケイ新聞」（7月7日）に

寄せた。このよく知られた遺言のような文章の最後の部分で彼は次のようなことを書いていた。「自分は、このまま日本にたいした希望を持つことはできない。このままでは「日本」はなくなつて、その代わりに、無機的で、からっぽで、中間色の、抜け目のない、経済大国が極東の一角に残るであろう。」今日、日本はもはや経済大国ではなくなりつつあるが、三島のこの遺言はおおよそ現実のものとなつたと思われる。だが三島はどうしてそのように考えたのだろうか。三島の戦後日本への憎悪にも似た嫌悪感は、何よりまず、敗戦の翌年に出された天皇の「人間宣言」に向けられた。それは、神という宗教的観念から天皇を切り離すものであった。そのことによつて、戦後日本の文化は歴史から切断され、全体的な統一性を失い、人間の営みを超えた「聖なるもの」への結びつきを失った。その結果、今日の日本文化は、にぎやかな楽しいものに満ちあふれているが、人の心を震わせることはできず、万事が脈絡なくバラバラに散らばっている。まとまりも芯もなくふわふわと漂うがごとき文化国家になつてしまった。これは社会秩序やその規範についても同様であろう。社会に秩序を与え、人々の規範意識や日常の常識を育てるものは、そこに根付いた習俗や、それなりの拡張を保つ文化であり、その背後には宗教的な

ものが横たわっている。欧米の自由や民主主義の背後にも宗教意識がある。日本はそれを断ち切った。それを象徴的にいえば、天皇の人間宣言による歴史の断絶だ、と三島はいうのであろう。戦後80年、今日の日本は、表面上は楽しく賑やかで楽園の様相を示している。その楽園を求めて外国人が押し寄せてくる。しかしその背後に広がるものが、無機的で、からっぽで、抜け目のない精神状態だとすれば、どうだろう。70年に江藤が投げかけた問いはその後、ほとんど忘れられてしまい、「ごっこの世界」が当然となつてゆく。

来月の参議院選挙にはコメ価格や給付金ばかりでなく、せっかくの80年目の節目ならば、「戦後論」を政治家に期待したくなるが、それも無理な話なのであろうか。以上で佐伯氏の論を締めている。「ごっこ」とは子供の遊びで何かになったつもりで遊ぶものだ。私の幼少期に裏門を作ってくれたので、家を守るつもりで竹やりを地面に突き立て西北の空をきつと睨んだのをいつまでも覚えていて、私は十二神将にそういう格好の像があるのを見つけて、因達羅いんだら大將像がそうだと思い、みちさんには俺はいんだら大將だと言っていた。これも「ごっこ」の遊び感覚で配偶者に気楽に話していたのだ。最近、璃子さんが新井薬師にお参りして十二神将の絵ハガキを面白いわと送られてきたのです。私にはつとして十二神将の絵をまじまじと見ました。それとは関係なく日本自体がみな「ごっこの世界」に居ると佐伯氏は云うのだ。私もうすうすそうではないかと思っていた。特に三

島由紀夫の顛末を28歳の時経験して、日本の事を思つて割腹自決する人がいるんだとびっくり仰天した。その後、三島由紀夫の豊饒の海4部作を全部読んだ。そして、大沢真幸著の「三島由紀夫のふたつの謎」(二〇二二)についての私見を本誌別冊閑話休題(7)に書いた。大沢氏は虚無の〇と異なる何かを「一の内的不可能性」と呼んで、これを譬えていうなら、海のイメージだという。海に向こうは決して見えないが、何かがある。誰かが居る。しかし向う側の何か、向こう側の誰かは決して姿を現さない。現前しない。現前したらこちら側のものにすでに転じているのだ。向う側は一に対する不可能なものとして存在している。この海に向う側のイメージは三島の作品の中に原始的な形で孕まれていた。虚無つまり〇から逃げたくなるのは当然だ。それは何も生まない不毛だからだ。しかし、一の内的不可能性つまり海に向こう側はこれとは似ているが違ふ非なるものだ。虚無とは逆に存在の母体、一を起点とする存在の母体だ。だから一の内的不可能性つまり海に向こう側こそほんとの豊饒の海である。三島はこれとは違う究極の不毛の海、つまり月の海をみたが故にそれに抗するべき必死の行動をとった。それがあの日の行動であつたのだ。以上が大沢氏の推論である。私はこの難しい表現を数学の集合で表現した。集合一の補集合が海に向こう側のイメージだ。一の集合の補集合を一cと書くと、これが海に向う側のイメージだ。これは一以外の集合だから海に向う側のこと、即ち豊饒の海だ。これとは違う海を見たから、それに抗うように必死の行動つまり割腹自殺した。これでも読者は分からないと思う。三島の最後の作品「豊饒の海」を読めば、作者本人の最後はあのような形を取るだろうと思う。上の佐伯啓思の云わん

とすることは三島の自殺のことではなく産経新聞に寄せた三島のエッセイのことで、現在の日本がそのエッセイの通りになっているのではないかと例示したかったのだ。敗戦によって神であった天皇が人間になって戦前までの日本の歴史が切斷された。ではどうすればよかったのか。三島由紀夫はどのように考えていたのか。飛鳥時代や奈良時代のような天皇を戴きその臣下が政治を行う聖徳太子のような摂政を置いて政治を行う形を思つてであらうか。確かに敗戦で何もかも失い、45年から52年までの七年間は空白の歴史として何もしなければよかったのか。この期間のなんと重要な時間であつたことかと思う。それこそ、日本のそう聖徳太子になつたつもりでほんとの生まれ変わった日本を造る日本人はいなかつたのか。「ごつこの世界」でもいいからこれからでも頭の体操でもしたらいいだろう。佐伯氏はそうとは書いていないが、そう言いたかつたのだ。記事とか文字で書くとはんとことは書きたくないのだ。文字の限界である。

\*7.3 朝日「穴はいたるところにある」という題の高村薫(作家)の意見が載つた。この内容は紹介しないが、右の佐伯氏の意見と同工異曲である。小説家は現代の位相の描写はできるが、解決策までは書けないのだ。原文を精読黙考すればそう言える。お前の意見はどうなんだと問われれば、なんと答えるか。人間はデイスクリート (discrete) だから、個々の人間をまとめて行動させようとすればあの国のテレビでみられるような軍隊の行進のようになる。個々の人間が仲良く集ま

つて議論して結論を出して行動する。こうしても皆が愚鈍ならば、良い結論が得られないだろう。世界全体が危機に陥つて、例えば今の温暖化が極まつてそう太陽が膨張を始めたら、国も糸瓜も亡くなるからみんな地球脱出を試みるだろうが、これとて上手くいくかは分からない。ノアの箱舟のようなことになつても、いずれは皆死んでしまうのだ。生きとし生けるもの悉く無に帰する。そんな何億年先のことではなく、先百年くらいを考えて良い考えを出せと言っているのだと誰かに怒られそうだ。それは難しい問だ。なるようにしかならないからあきらめの哲学に徹するとしか言えません。

芭蕉の軽み以後 (117)

光成高志

谷の傍かたわらに鍛冶小屋と云有いうあり。此国の鍛冶、靈水を書えらびて、爰こに潔斎けつさいして劍つるぎを打、終つに「月山」と銘を切て世に賞せらる。彼かの竜泉りようせんに劍を淬にらぐとかや。干将かんしょう・莫耶ばくやのむかしをしたふ。道に堪能かんのうの執しゅうあさからぬ事しられたり。岩に腰かけてしばしやすらふほど、三尺ばかりなる桜のつばみ半ばひらけるあり。ふり積雪の下に埋て、春を忘れぬ遅ざくらの花の心わりなし。炎天の梅花ばいか爰こにかほるがごとし。行尊僧正の歌の哀も爰こに思ひ出て、猶なおもまさりて覚ゆ。惣そう

じて、此の山中の微細<sup>みさい</sup>、行者の法式として他言する事を禁ず。仍<sup>なほ</sup>よつて筆をとめて記さず。坊に帰れば、阿闍梨の需<sup>もとめ</sup>に依<sup>より</sup>て、三山順礼の句々短冊に書。

涼しさやほの三か月の羽黒山  
雲の峰いくつ崩れて月の山

語られぬ湯殿にぬらす袂かな  
湯殿山銭ふむ道の泪かな

曾良

この項の文も解説しなければ分らないような難しい用語が出てくるので、先に引用した山本健吉による現代語訳を載せて通過する。「降りる途中、谷の傍らに鍛冶小屋というのがある。この国の刀鍛冶が、靈水を選んでここに地を定め、潔斎した剣を打ち、ついに月山と銘を切つて世にもてはやされた。かの中国汝南西平<sup>じよなんせいへい</sup>の龍泉の水に、焼いた剣を浸したという。呉の名工干将<sup>かんしょう</sup>と妻莫耶<sup>ばくや</sup>の昔をしたう、一道にすぐれた者の執心が知られるのである。岩に腰かけしばらく休んでいると、三尺ばかりの桜の苔のなかば開いたのがある。降り積む雪の下に埋もれていて、春を忘れず咲く遅桜の花の心は、自然の理とはいふものの、いじらしいものである。宋の簡齋が言う「炎天の梅花」が、ここに薰るようである。行尊僧正の歌のあわれもこのとき思い出され、この桜の花のあわれが

それにもまさつて感ぜられるのである。総じてこの湯殿山中の細かなことは、他言することを禁じている。

それで筆をとめてこれ以上は記さない。坊に帰ると、阿闍梨会覚の求めによつて、三山巡礼の句々を短冊に書いた（表紙の写真参照）。

涼しさやほの三か月の羽黒山

（仄かな三日月に照らし出された羽黒山の姿を、南谷の坊から見てみると、如何にも涼しい感じである。）

雲の峰いくつ崩れて月の山

（月山が月の光に隈なく照らされて、眼前に雄偉な山容を現している。昼間立っていたあの雲の峰が、いくつ立ちいくつ崩れて、現れ出た月のお山であるか。）

語られぬ湯殿にぬらす袂かな

（湯殿山の神祕は人に語ることを禁じられている。その語られぬ感動を胸に籠めて、ひそかに感涙に袂を濡らすことであるよ。季題は「湯殿詣」。）

湯殿山銭ふむ道の泪かな

曾良

（湯殿山に詣でる人の賽銭が道々に散らばり、それを踏みながらお宮に詣で、感涙にむせぶことよ。季題は前に同じ。）

ここで少し解説をする。「剣を淬<sup>しら</sup>ぐ」というのは、刀身を焼いて水に入れ鋼の質を高めることで、俗にヤキイレとかヤキヲ入レルという工程のこと。干将・莫耶についての説話は古代中国の幾つもの文集に見ら



れる。我が国の文集『宝物集』『今昔物語集』『太平記』『曾我物語』『三国伝記』などに引かれている。芭蕉の「彼かの竜泉りょうせんに劍を淬しらぐとかや」と言っているのは、太平記の記事にもとづくものと思われるという（栗田勇著）。太平記は手持ちがあるが、今はITにて検索して現代語訳にて、当該記事を見られるので、そこをコピペして置く。「昔、周の末の時代に、楚王という王が武力で天下を取るために戦いを習いとし劍を好むことが長かった。ある時、楚王の夫人が鉄の柱に寄りかかって涼んでおられたが気分が悪くなって、急に懐妊の様子になられた。十ヶ月を過ぎて後、一つの鉄の玉を産み落とされた。楚王はこれを不思議とも思わず、きつとこれは鉄の精霊なのだろうと思って干将という鍛冶をお呼びになつて、この鉄で劍を作つてくるようにお命じになった。干将はこの鉄をいただいてその妻の莫耶と一緒に呉山の中に行き、龍泉の水で焼きを入れて三年の後に雌雄の二振りの劍を作った。」太平記のこの項はまだ延々と続くのであるが、芭蕉はこのような中国の故事の書かれている太平記を読んでしたことになる。太平記は、南北朝時代の動乱を描く軍記物語であり、備後の桜山茲俊これとしの事も書かれているので触れたことがあるが、ここでは無関係。このような中国の故事を引用した部分が多い歴史物語でもある。芭蕉が太平記を読んでいなくても先述の『宝物集』『今昔物語集』を読んでおれば書けるのではないか

と私は思ったが、このような詮議をしなくてもこの干将・莫耶の伝説は有名であり、近代の海音寺潮五郎までも小説に利用しているほどである。これより芭蕉の心惹かれたのは、次の岩に腰かけて休んでいると三尺ばかりの桜の荅を見たことである。行尊僧正の歌のあわれも思い出した歌は、「大峰にて思ひもかけず桜の花の咲きたりけるを見てよめる」とまえがきして挙げられた「もろともにあはれと思へ山桜花よりほかに知る人もなし」の歌である。歌の意味は、深山の常盤木とさわぎの中に思いもかけず桜の花を見出し、この山中で花よりほかに知友もないのだから、自分が花をいとおしく思うように、せめて桜もまた自分をいとおしく思つてほしい、と呼び掛けている。芭蕉がここで行尊の歌を踏まえて古典の宋の簡齋が言う「炎天の梅花」より一層趣ふかく感じられると言っている。この桜の花の所は、現代訳では、すんなり、「三尺ばかりの桜の荅のなかば開いたのがある。降り積む雪の下に埋もれていて、春を忘れず咲く遅桜の花の心は、自然の理とはいうものの、いじらしいものである。」となるが、花の心に芭蕉は心惹かれて、身の内にたぎるものの止むにやまれぬ心、そこに文芸の道を歩む者としての指針を見出したのである。花の心のわりなさに共感と、花よりほかに知る人もなしという深山での孤独な苦行

の果てに得た悟りというひそかなる自持の気持ちが含まれている。「わりなし」を古語辞典で引くと、①から⑦まで意味が書かれている。⑦にいじらしい、殊勝だとあって、例文としてこの奥の細道・出羽三山の文が書かれてある。因みにマイナペディアというITでは徒然草が出典となっていてこれは明らかな間違い。蛇足だが検索するときの注意と思い敢えて書き残した。羽黒山滞在中に「悼遠流天有法印」の一文を草す。

この追悼文は省略するが、簡略すると、出羽三山については、羽黒山大神の本地を觀世音菩薩として、山頂に寂光寺建立される。月山神は阿弥陀如来、湯殿山大神は大日如来が本地と定められた。このような神仏習合の信仰は神社の境内に神宮寺、別当寺を建てる型となり明治維新（一八六八）に神仏分離令が發布されるまで続いた。こうした神仏習合の風潮の中で出羽三山では修験道が起こり発展してゆく。これに協力携わった執行しゆぎようもしくは別当は大化から承安、建久、慶長、寛永まで時代の権力者の庇護を受け強固な宗権を背景に隆盛した。しかし羽黒山も鎌倉から戦国時代にかけて諸豪族の権力争奪に巻き込まれ、一山の衆徒の結束も弱まり社領も狭められた。しかし、関ヶ原の戦いで戦功のあつた最上義光は宥源ゆうげんを別当に据え、荒廃した羽黒山の再興を行い、羽黒本社、五重塔、黄

金堂などの修復事業を進めた。この後、宥源の弟子宥俊ゆうしゅんは宥源の御影堂、普賢堂などを建て、五重塔の修復などを行い、松や杉の植栽に尽くした。宥源の後を継いだのが弟子の宥誉ゆうよであり、寛永十一年（一六三四）出羽三山の再建を願い、宥誉は師の宥俊同道にて將軍家光に謁見した。これは徳川家が天海大僧正を崇敬して天台宗に帰依したことにより、幕府のお墨付きのもとに、真言宗の出羽三山を天台宗に改めて、東叡山寛永寺の末寺となることを計画したもので、宥誉はこの大願成就のため天海の弟子となり、師の一字を貰って天宥と名を改めた（一六四二）。天宥は羽黒山に日光東照宮を勧請して山内に祀り、一の坂下の普賢堂から六七〇間に及ぶ参道に切石を敷くなど、様々に手を尽くし、天台による三山統一を目指した。だが、天海大僧正が寛永二十年（一六四三）遷化したため、強力な後ろ盾を失い、ついに真言宗を貫く湯殿山四力寺を天台羽黒の下に取り込むことはできなかった。さらに天宥にいちやもんを付けられて、羽黒衆徒のお寺さんなどとの間で対立が生じ、幕府を巻き込んだ裁判沙汰に発展した結果、天宥は寛文八年（一六八八）伊豆新島に流された。天宥は新島で七年の歳月を過ごし、延宝二年（一六七四）八十二歳で亡くなった。芭蕉が羽黒を訪れた元禄二年（一六八九）は、天宥の死から

十五年の後であった。芭蕉の追悼文は省略したが、追悼の意をよく顯した文になっていて、一山挙げて其名をしたひ、其徳をあふぐ。まことにふたゝび羽山開基にひとし。されどいかなる天災のなせるにやあらん、いつの国八重の汐風に身をたゞよひて云々とせつかく巡礼の序に追悼一句を奉るべきよし、門徒等しきりにすゝめらるゝによりて、をろく戯言一句をつらねて、香の後に手向侍る。いと憚多きことなん侍る。と追悼文の最後に「其玉や羽黒にかへす法の月」元禄二年季夏と句を書いている。天有法印の靈魂はかの止観圓角の仏法の光の如く、冴えわたる羽黒山に帰るであらうとの意味。季夏と書いてあるので、法の月は夏の月のことでこれが季語である。この後、六月九日、曾良の随行日記によると、天気吉折々曇。断食。以下私流に訳すと、断食して昼にそうめんを食べるお山成就祝いのしきたりをして、又、和光院（会寛）がお出でになり、飯・銘酒などを持参され、申刻午後四時頃になる。連句の名残の花の句を進んで歌仙が終わった。発句は四日羽黒山本坊於いて「有難や雪をかほらす南谷（翁）」である。曾良発句、四句迄出来る。十日曇。飯道寺・正行坊が来て会った。昼前、本坊に帰って蕎麦きり・茶・酒など出。未の上刻午後二時になる。道まで円入に迎えられる。又、大杉根迄送られる。祓川にして手水

して下る。左吉の宅より翁計馬にて、光堂（黄金堂）迄釣雪送る。佐吉同道。道々小雨す。濡るるに不及。申の刻（午後4時）、鶴岡の長山五郎右衛門宅に至る。粥を望み、終えて眠り休み、夜に入って発句が出来て一巡終る。この時の芭蕉の発句は「めづらしや山をいで羽の初茄子」である。以上で出羽三山は終る。なんと芭蕉の多忙のことか。

お便り広場

光成様いつもありがとうございます!!ジブリAI似せてきていますねーいい感じです。40部の反応はいかに!?やめない程度に細々と俳句続けています。みちさんと仲良く（あまり迷惑かけないよう）人生を謳歌して下さいね。（6.23木戸敦子）。（6.30三浦省五君より電話あり。みちさんが応対。短期留学に累計60人位世話をした。奥さんは佐伯市の出。母堂は100歳を超えられ、今は施設に入居している云々）。光成高志様 梅雨があけ、暑い日が続いています。先日は句集俳諧「白金蔭」を送っていただきました。少しづつ味あわせてもらっています（長文も。私は作句など苦手です。うらやましく思います。俳句については、一年前広大建築の一級下の木村武馬君（徳山在住）が句集を送って来ました。また、私の兄の藤谷光信（岩国教蓮寺前住職・元参議）は、岩国の俳句団体結社「対岸」で俳句三昧です。妹の久保葉子（防府）も俳句にをたしなんでいます。光成さんお元気のようですね。うれしく思います。

私は長年、潰瘍性大腸炎を患っていましたが、今は良くなっています。三年前に胃がん（初期）でWSD手術をしました。この三月は気管支肺炎もありましたが、今は元気で。話は変わりますが、女流作家の宇野千代のお墓が私の生家の岩国市川西の教蓮寺にあります。毎年六月十日には薄桜忌が営まれ、今年も私（と息子で）参りました。宇野千代をモデルにしたNHKの連続テレビ小説「ブラッサム」が、来秋から放送予定です。この薄桜忌を取材した新聞のコピーを送ります。光成さんお元気で活躍してください（<sup>30</sup>藤谷義信）。藤谷君お元気でなによりです。風の便りで調子よくないらしいと聞いていましたが、毎年賀状が届くので心配はしていませんでした。丁寧な手紙拝受しました。お兄さんの名刺は麻布十番の善福寺に置いてありました。当時は参議院議員でした。福沢諭吉の碑や越路吹雪の墓もあり高層マンションも見え、赤い靴の女の子の銅像もあり、又有色の銭湯に入ったり、六本木に近いこともあり、あちこち吟行して歩いた街でした。辻桃子さんの会にて。貴方の生家の教蓮寺には皆泊まらしてもらった。お母様の味噌汁をいただき、また竹原の前方の島の出であるとお聞きして、より懐かしく思った覚えがあります。昭和四〇年冬でした。宇野千代について、私はよく知りません。来秋のドラマを見て考えましょう。ブラッサムとは、チェリーブラッサムのことですかね？私の通っているスポーツジムに装束の林さんが居て、ランチおしゃべり会で彼にしゃべらすといつも岩国の自慢をされる。宇野千代の事を聞いてみたら知っているけど向こうではよく言わないとか。お兄様の対岸は今瀬剛一さんが主宰で、私はその歳時記をもっています。正統派です。）

前略先日は「白金葎」六月号を送っていたいただきありがとうございました。『白金葎』に投句の際は大変お世話になりました。竹原俳句会に入って二年となりました。会の皆さんに俳句を教えてもらい何とか続けています。白金葎の投句や誌友には、申し訳ございませんが、難しいです。畑は野菜をいろいろと作っています。暑くなります。お体ご自愛下さい。最近の俳句を書きました。六月三十日 尾崎昇

春嵐白波瀬戸の島洗ふ 白魚の網を引き揚げ卵とじ黄いと白戯れ舞の蝶々かな 風吹かず蚊柱立ちて雨近し（蚊柱はユスリカのこと）一斉に旗揚げ今朝の茗荷竹 そよ風に伸びる新芽や葡萄の木 竹原俳句会に投句した句です。白魚の俳句以外はすべて現場で句を作りスマホのメモアプリに入れ直しました。草々（<sup>7.1</sup>昇）（昇君元気で作句投句されてゐてご同慶の至りです。作句を現場するのは俳句の要諦ですね。メモアプリもいいですが、ミニ句帳もいいですよ。手と頭を動かせば書きとめるのは何でもOKです。ユスリカは蠓まぐなぎのことです。下の蠓と書いてまくなぎと読んでもいい。私の畑でも夏の夕によく現れるよ。まくなぎが立つと表現するが、俳句では立つのは当たり前だから言わないで、「まくなぎの阿鼻叫喚をふりかぶる」（三鬼）「蠓を泣かむばかりにうちらはらひ」（誓子）などがあります。現場で作るのは大切ですが、発表する前に歳時記でチェックするのも大切です。）六月号白金葎と表紙を飾った三人の写真ありますがとうございました。七月を明日にしてカ

レンダー等にスケジュール書き込み、酷暑の中する事はいろ／＼あるもの、生きて一人住みを選んだからには、頑張るしかなしです。お二人方様も暑さにお氣をつけて。体調崩してもう一年近く七日に市から更新（介護保険）のために担当の方が来訪とのこと、お役所も暑さの中、何かと大変。ジブリ画像みちさまはカワイらしく、私マンガチック、先生のおひげリッパです。今回は御礼まで。書くのは好きなので又の折に（7.2璃子）。光成高志様 敏子様 白金蔭6月号受け取りました。表紙の写真笑顔がステキですね。幸せな気持ちになり何度も見えています。これからもお元気でいてくださいね。ねんどの会作陶展、車で40分かけておいでください有難うございました。表紙にも作品の写真を載せて頂き、恥ずかしいと言いながら嬉しそうな顔をしていました。次の作品作りへの意欲になっています。また、句も作ってください感激しております。6月は連日のように三〇℃以上の夏日が続く庭の青色紫陽花が日焼けで一瞬にして茶色くなってしまうしました。梅雨空が戻っても三〇℃以上の日々。まだ梅雨は明けていませんが猛暑の6月は今まで経験がないです。畑では先週ゴウヤが二本取れました。トマト、胡瓜、ナス、インゲン、モロッコインゲン、シシトウ、ピーマン等近所へのお裾分けが始まりそうです。真夏

はこれから、無理なさらずお体を大切に俳句作り楽しんでください（7.7良範・朋子）。光成様 早い梅雨明けで今年の夏は猛暑が長期戦になりそうですね。たいへんご無沙汰しております。この度は「白金蔭」六月号をお送り下さりありがとうございます。表紙の写真すっかり風流人になられお元気に活躍のこと嬉しいかぎりです。頂いた句誌を読み進めるうちに主人の詩歌集「四季彩」のことが目にとまり本当にびっくりしました。小さな拙い句集ですが読んで頂いて誠にありがとうございます。二〇二三年十一月三日早朝主人は突然入院することになりコロナ禍の中面会もままならず体調は悪い方へどん／＼進行了ましたが、最後まで俳句・短歌に命をかけておりました。主人の生きた証しにその気持ちを残したいとの思いで句集作りを決心しました。誤嚥性肺炎で病院へ駆け付けた時には別れの言葉を交わすことも出来ない状態でした。残念でなりません。亡くなつて二年半遺影に向かって日々の色々な出来事を語りかけています。三人いる孫のうち（長女の息子二人、外孫）二人が次々と結婚し兄には先月子供が、私にとつては初ひ孫が誕生したことなど報告に事欠きません。皆に囲まれてパワーをいっぱい受け止めて私はお蔭で元気に過ごさせて頂いています。句誌の中にあつた東大生の話しですが、二十年

前長女の夫が幼い二人の息子（七才、四才）を残して病死してしまいました。途方にくれる長女を松本市から福山に呼び家を建てそこでシングルマザーとして子育てをしました。女手一つで育てた息子達二人が東大に入ったので話題？になったのかシングルマザー奮闘記 東大とグリーンカレー”というタイトルでドラマ化され、彼らが在学中に全国放送されました。この頑張った母は趣味でゴスペルサークルに入って歌っていたけど、もう一歩前に進みたいと現在は広島市にあるプロダクションに歌手として所属しあちこちでコンサートを開いています。（中略）内孫は高校三年生の男子一人、受験勉強中、六月中旬に通っている中高一貫校の文化祭があり生徒会役員なので準備司会などに追われていたけど、これからは受験勉強に集中出来そうで私もホッとしています。私は今まで子・孫達をしつかり見守っているという感覚でいましたが、一人になつてふと、私は皆から見守られているのでは？と気付くようになりました。確かにいたわられているのをひしひしと感じます。気付くのが遅いですよね。もう年です。気分は若いつもりでも体は歳相応です。夫の分も長生きして家族、世の中のことなど沢山のお土産話をあちらに届けたいと思っています。もう少し待っていてねと話しかける今日この頃です。（中略）さて

本題が後になってしまいました。俳句・短歌を読むのは大好きです。光成さんの俳句への深い思い、知識などのこもった「白金葎」を拝読しながら新しいことを知れたらと思います。何のお役にも立たなくてただ読ませてもらうだけになってしまいかもしれませんが句誌をお送り頂けますか。よろしくお願い致します。外に出るとくらぐりする程の猛暑が続いています。畑、庭の水やりに追われています。どうぞお身体ご自愛下さいね。お互い元気でこの夏を乗り越えましょうね。乱文にて かしこ 追伸（略）（7.7廣本幸恵）。（幸恵さん！久方ぶりの手紙をいただき、貴女のこの20年の歩みを書いてあったのでよくわかりました。今までご主人の俳句作品のことで手紙の交信があつたかと思いますが、その五年前の平成12年（二〇〇〇）の手紙が最初かと、私の闘病記を出版した本を姉が差し上げ、その返礼の手紙です。同じ町内にお住まいとアツと驚いた覚えがあります。お家の横を車で通った記憶もあります。そういう過去の事は終ったこと、振り返っても詮方ありません。二人のお孫さんの東大生になる奮闘記は私には面白く思えました。少し気にかかったことは、松本のご主人のご両親に触れた文章がなかったことです。幸恵さんと貴さんの間には二人のお子さんがありなんですね。長女の方がテレビの題材になるような今は歌手として活躍され、長男のお子さんつまり幸恵さんの内孫さんが今高三で受験勉強中とのこと。これで正しいですか？ご主人の入院中に句・短歌集を作ろうと決心され見事に「四季彩」という短歌・

句集を上梓されました。拍手!! 追伸の注意書きはご心配に及びません。過去は過去、未来に向かって歩むのみですから。手紙そのものが書簡という文章になっており一種の文学ですから後に残るものです。芭蕉の書簡集はわれわれの重要な資料となつてゐるようにこの冊子もしばらくは残るでしょう。酷暑中お見舞い申し上げます。ジブリ画像の白金葎、ほゝえみながら拝読致しました。空梅雨もアツという間に明け水不足の心配が生じて不安な夏が来そうです。俳誌をいただく度にハッパをかけられ、今年も日展鑑賞に上京したいと人參を目の前にブラさげながらヨタヨタと走っている馬<sup>七</sup>歳。八十三才の私です。いかに体調キープするかの方に気を配る歳になりました。トホホ・・・元気で居ましょう(7.10綾女)。(私も同感同調です。三つも持病あつて医者通い。トホホ・・・です。) 猛暑が続きたいへんな毎日ですね。皆それぞれ、たいへんな中人生を生きているのだと自分に云い聞かせて思い直してがんばっています。感謝しながら。少し体の調子が悪いのでかかりつけの医院に行きました。先生は私の顔など見ずカルテばかり見て水分取りなさい、歩きなさい、三分ほどで終わり注射一本して待つて40分薬が何粒も出て私は薬を飲むのは好きでない。「毒をもつて薬となす」今は何もかも進歩してそんな事は云われないけど人間の身体は自然に治す力もあると思うので、子供の頃指を切つて血が出たら明

治生まれのおじいさんがニラをもんで切口に付けてもらつた思い出があります。昔を云うな、昭和の考えを捨てなさいと何時も伸明に云わしています。長く生きて出来ない事が多くなりましたが生きなければと思つています。お体十分気を付けられてがんばつてください。乱筆にて(7.14幸子)。(自分の生活の周りの草花や生きものの例えば蟻とか燕とか空の色などそういうものを季語と言つて時間と共にゆるやかにみえても確実に変化しています。そういうものに心を移してみて書いてみてください。) 連日の猛暑にバテぎみですこの先が思いやられます7月の投句いたします(7.13正美)。光成さんいつも白金葎をご送付頂き有難うございます。異常気象で暑さが続きます。お互いに体を氣にして行く年齢になりましたね。6月号の白金葎に記載されている田植する様子が細かく表現されておりました。今の日本人の食卓に必要な「お米」について価格の上昇と、備蓄米の問題があり、今年のコメの確保が少し心配です。農家の方の「米」に対する愛着の記事と、新潟の6日町に稲刈りにまでの育て方に合鴨農法という言葉があり、農家の作業にも俳句の季語があることに氣づかされました。7月号の投句宜しくお願い致します。暑いから皆さん氣付けてください(7.14寿幸)。光成先生みち先生いつもいろいろ大変御世話になっております。いつもお

手数おかけ致しまして誠に申し訳ございません。どうぞよろしくお願い申し上げます（7.14 由紀子）。

# 我孫子日記

	6/20	句会
	6/21	駅前ク(泌尿)
	6/24	胃袋透視
	6/25	五井齒科
	6/26	光会
	6/30	こやの皮膚科
	7/2	
*1	五井齒科	
	7/8	長寿健診
	7/9	五井齒科
	7/11	
*2	JH→花の丘公園	
	7/12	JHにて鈴虫購入
	7/13	
*3	手賀沼ふれあい道路	
	7/16	
*4	歯科・利根親水公園	
	7/18	
	句会	

\*1 梅雨明け兆し歯を削る音の中

\*2 いにい蟬風の葉擦れの音の中

黄木蓮青葉に風のゆるやかに

黒鉢の幾つも置かれ蓮咲きぬ

黒鉢の蓮の花茎細くして

七夕竹短冊数多葉は枯れて

みそはぎの紫小花密集す

半夏生密集の種棒曲がる

やはり飛ぶ幼き飛蝗なりしとも

真紅の薔薇残る名はウインシヨッテン

アナベル紫陽花の白き花咲く花壇奥

令法の花萎れてゐたり花の丘

溝萩の花穂向き向きに伸び伸びに（みち）

半夏生草虎の尾に似る実を伸ばす（リ）

子の飛蝗まことに小さき脚四つ（リ）

七月の薔薇園一つ真紅あり（リ）

花の丘囲む森あり木下闇（リ）

アナベルてふ紫陽花膨らむ花の丘（リ）

\*3 沼風を受けて大揺れ蓮の花（リ）

蕾立ち徐々に色付く蓮の花（リ）

藕糸蓮ぐうしれん中將姫のことに触れ（リ）

\*4 いにい蟬バーにて奥歯削る音

蓮蕾開き初そめたり握り見る

蓮池の遠見桃源郷の如

蓮の露吹かれて落つる水の音（みち）

## 編集後記

六月号（165号）から俳句に限らず書簡なら何でも受けますと知友に本誌を郵送しました。十人の方から返事をいただきました。ありがとうございます。毎月何か書いて書簡にするのは面倒かと思いますが、俳文という分野があつて季語に視点を移せば題材はいくらでもあります。どうか現在の事を気楽にお書き下さい。話し言葉と書き言葉という題にて一文を書こうと思つています。

白金葭7月号（通巻166号）誌代一部千五百円（年会費一万五千円）郵便振込口座一〇五二〇一四二二三六一名義シロガネヨシ令和七年7月20日発行編集発行人光成高志発行所〒270-1119我孫子市南新木2-14-17光成方 投句先・メール又はライン印刷製本・喜怒哀楽書房〒950-0801 新潟市東区津島屋七二一九。表紙の題字は嘉悦羊三&芭蕉の三山巡礼の句&7.17の白金葭&璃子句集「穴まどひ」からの選句。